

「現代中国学」と「東洋史学」の狭間で
——加々美光行氏の論文、著書を読んで思う——

小林一美

(神奈川大学名誉教授)

加々美光行氏の論文「現代中国学の新しいパラダイムをめぐって」、及び著書『鏡の中の日本と中国』を読んで、氏の該博な知識と精緻な理論的な分析に感銘を受けつつ、若干の感想を述べよう。

まず、私が学んだ東洋史学と現代中国学とがいかに無縁な関係であったか、またそれは何故かについて語ろうと思う。1957年に大学の文学部東洋史学科に入学した頃、中国近代史を学び卒業論文を書くのは、何か恥ずかしい気分であった。当時の教室の雰囲気は、近代史、現代史は研究対象が流動状態にあり、また時の政治情勢、日中関係の変化などによって研究主体の価値観と研究対象が絶えず変化している。厳密な史料批判もできず、客観的な検証や価値判断ができない。従って評論家風の時局論に終わるからだ、といった理由であった。また私が尊敬していた中国史家の恩師は、人民中国の「歴史研究は全体に水準が低くて学問的には評価できない。史料の編纂事業だけは別だが」と言っていた。こうした雰囲気は、当時一般的であった。その理由は、「日本の東洋史は世界に冠たるものであり、本家の中国に勝る」といった戦前から日本東洋史学が持っていた優越感にあった。1950年代中頃、京大の東洋史学教室にいた森正夫氏の回想記にも、東洋史の先輩方がこうした自慢話をした話が出てくる。もう一つ、当時先生方は、当時の中国の歴史学者は党の政治宣伝下にあったため極端で幼稚な階級闘争史観を振り回していたので、首肯し難かったためであろう。

こうした感情は、1980年代から急速に変化したが、しかし、未だに日本の東洋史学者の中に残っている。日本の東洋史学の基礎を築いた人たちは、明治以降、国家の威光を増すため、また大陸進出を前提にして、朝鮮半島、中国西北部や中国周辺の歴史地理学の研究で、欧米の学者の水準を超えて世界東洋学の

第一線に出ようとした。また、京大の東洋史学の内藤湖南、宮崎市定等は中国史の中に「古代、中世、近世、近代」というヨーロッパ史の歴史的展開と同じ発展過程を発見しようとした。こうした研究の動機は、当時の日本人が西洋人から問題意識を与えられ、また西洋人を対象に設定した問題意識であった。中国の史学界から学んだものではなかった。こうして日本人学者の中国史に対する「本家意識」(中国の歴史は、本家より日本人の方が詳しく研究しているとする意識)が形成された。戦後は、更にまた、わが恩師のように、中国の歴史学は党の宣伝以外の何物でもないとして、中国史学界を軽蔑してきたのである。私に中にもそうした意識はまだ残っている

戦後日本では、マルクス主義歴史学が隆盛となり、若手を中心にして、中国史の中にも「世界史の発展法則が貫いている」のだ、「アジアの停滞性理論を打破しなければならない」という気分が蔓延した。こうした研究動機の下に、階級関係、生産関係の転換に基軸を置いた「歴史発展の時代区分」を定めることが、正当な目的論的価値判断に基づく研究であり、因果の発展法則で問題を究明する科学的方法である、ということになった。こうした階級関係を重視するマルクス主義的歴史学に反発する京大の川勝義雄、谷川道雄両氏は、中国世界の固有の歴史的発展の基軸を「共同体」の発展過程に置き、中国史の中に倫理共同体の発展、拡大をみようとした。しかし、どちらも70年代から影響力を失ったように思う。また、一部のもは中国社会主義政権や毛沢東の中に専制権力の復活、拡大をみて、中国史全体を東洋的専制主義の発展過程とみなすようになり、中国専制主義国家史の理論的実証的研究に集中していった。

最近の中国史研究は、共通の問題意識、研究目的、理論方法を持たない状況下にある。しかし、一方では細かい「客観性を誇る」実証主義的な論文や著書がたくさん出ている。最近、〇〇先生〇〇記念論文集なるものがよく出るが、それ等を見れば、研究者が孤立分散状況にある様子がよく分かると思う。来るべき未来の世界像、理想社会像を失い、史学方法論を失った今、「利他的な実証主義的客観主義」の中に安住の地を求めんとしているのであろう。しかし、谷川さんのように、中国史を共同体的倫理・自由の発展史として把握しようとしている、孤独な闘いをしている人もいるにはいる。私自身は、中国史を中華世

界という、固有の文明・帝国史的歴史の展開過程であり、現在はこの中華帝國的国制から、近代国家への過渡期と考える。が、しかしこれが普通の近代的国民国家に移行するのか、世界帝国型の近代的全体主義国家に変質するのか、不明である。もし后者ならば、大規模に核武装し多数の大陸間弾道弾をもった、独裁国家の登場となろう。

さて、私の中に残っている「伝統的東洋史学」の気分について触れよう。今でも私は、「現代中国学」などというものは、果たして「学」の名に値するのだろうか、などと言う不遜な感情から完全には抜け出していない。単に時流に乗り、時流を論ずるだけではないか、などと思ったりする。加々美論文に出てくる「アジア政経学会」などというものはこれまで名称すら知らなかったし、「現代中国学会」にも、昔 2・3 回出席したが面白くなく脱退した。石川忠雄、衛藤藩吉両氏などの御名前はもちろん知っていたが、中国史研究の真つ当な世界の住人ではないと思っていた。従って仲間の中で話題にもしたことがない。加々美論文に出てくる多くの人々の名前は、当時からアメリカの研究状況ばかり書く変な人くらいにしか思えず、以後忘れてしまった。私のように、現代史にもかなり関心がある人間ですらこうであるから、東洋史学と現代中国学の間には大きな溝があり、お互いに別世界の人間であると思ってきた長い歴史があるように思う。現代中国学者は中国の歴史を知らず、東洋史家は現代中国を無視する、こうしたねじれ現象を先ず指摘しておこう。

私と同時代に中国現代史を大学、大学院で長く学んだ女性（後に高校教師、障害者教育を専門職とした）に加々美論文を読んでもらって感想を聞いた。彼女は「何だか知らない学会や馴染みのない人物が多く出てきて眠くなり途中でやめた」と言っていた。また、欧米人の学説や理論、問題提起の話が多く、「オリエンタリズム批判も含めて、欧米の犬がこう吠えた、ああ鳴いたという話が多すぎる。少し欧米人の学問書、学説を読み、学びすぎているのではないか。日本人独自の問題意識、日本の歴史と文化を背負った問題提起や学問的発信が世界に向けてできないのか」と言っていた。彼女にかかると、秀才の加々美さんの論文もどうも評判があまり良くない。彼女の感想には、私もかなり同感できる。日本の秀才は、欧米人や欧米的知性をもった外国人の言説に騒ぎすぎでは

ないかと思うことがある。日本人の欧米崇拜という軽薄な傾向を批判する加々美さんさえも、やはり同じ土表の上にあるのだろうか。とすれば困ったことである。「オリエンタリズム」、「コ・ビヘイビオリズム」などカタカナが多すぎる。また「共同主観的存在構造」などと言う語も、難しすぎる。簡単に言えば、研究者は研究対象からも、たえず反作用を受けており、研究主体の価値観も絶えず変化を迫られる、両者はこうした相互連動、相互反応の関係にある、ということであろう。

さて、日本の現代中国学に携わる人々が加々美さんの言うように、客観的観測と称して自己満足し、目的論的価値判断や科学的方法などの意味を全く考えずにおり、アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの国や人や学問を馬鹿にして見下してきたと、私もそう思う。この点の批判には賛成である。

次に、読んで問題点だと思ったことを少し書いてみよう。今のように外国人が沢山日本に住み、国際結婚も多くなり、また日本在住の中国人など外国人の評論家、大学教授、芸術家も多い時代となり、地球がこんなに狭く人間が密接な関係をもつような時代に、「中国学、インド学、イラン学、インドネシア学、タイ学、イラク学」等々の国名を付けた「現代世界研究」でよいのか、大いに問題を感じる。アメリカから出てきた「地域研究」が、アメリカの世界戦略からする「地理的民族的区分」であり、それを批判して明確に国別の細かい学問を打ちたてようとするのは理解できる。しかし、21世紀にはおそらく人類は、今のような国家、国家群を中心にした「世界経営」では行きづまることは間違いない。国家ごとに「学」があっては困るのではないか。また、「目的論的価値判断」は大切だという意見であり、私も大いに賛成である。しかし、次に現代中国学は如何なる課題を、何の目的で、どのようにするか。また誰を相手に、誰のために、研究するか等々が問題になるのだと思う。日本国民か、日本政府か、中国の為政者か、貧しい人民階級か、抑圧されていると叫んでいる少数民族のためか。また、何を中国研究の中心課題に研究すべきか、具体的に提起していただきたいと思う。「新しいパラダイム論」だけ探していても、事態は急転しているので、空しく思う。また加々美さんは、日本人の中国学専門家に、謙虚になって中国人から学ぶべきだ、客観的で正確な観測をしているなどと自惚

れてはダメであり、自分の研究が日本の国策に乗り、利用されることも考えて自戒すべきだという。正論である。しかし、加々美さんは、AALA 研究が持つ恐ろしい世界、恐怖の状況について指摘していない。朝鮮史家の梶村さんは、好ましからざる人物として韓国に入国することができなかった。たしか 1 度も韓国にも、北朝鮮にも行ったことがなかったのではないかと思う。AALA には独裁国家や軍事政権が実に多い。こうした国々を研究する時には、「入国拒否」、「学術交流拒否」、「交換教育事業拒否」などを恐れて、自己の研究目的、研究成果を隠し、捻じ曲げ、オブラートに包み、時の国家権力におもねる研究者、ジャーナリストが出てくるのは当然である。むしろこの方が恐ろしいのではないであろうか。例えば、中国政府が行っている少数民族政策、あるいは環境問題、人権問題、土地政策などを取り上げる時、さまざまな困難が予想される。個人的な利害関係を勘案して、自己と他人をごまかそうという気持ちも出てくる。こうしたことが日本人の現代中国学研究者にもあるのではないか。また逆に、極めて政治的な反中国宣伝を目的にする研究も出てくるだろう。また、ジャーナリストと現代中国学学者には違いがあるのだろうか。こうした切迫した問題がある。以上が私の提起する問題である。

私は、自分が現代中国学の専門だと思わないので、思いつきで述べるのであるが、次の 4 つの視点＝価値評価点から現代中国学の「在るべき位置」を探りたいと思っている。

- (A) 「自由、平等、民主、人権、博愛」等の自由主義的な普遍的な価値観を、これをとりあえず普遍的理念として研究の前提にする。
- (B) 「中国の国家・地域の権力の性格、及び政治的経済的社会的状況の実態、状況」を中心的課題として分析する。そして、国家社会の実態と基本矛盾を明確にする。
- (C) 「中国の歴史・文化など過去からくる伝統的威力の性格と影響」を研究して、こうした要因が、(B) に及ぼしている力を解析する。
- (D) 「日本と中国との現在の国際関係」を、世界的現状分析のなかで位置付け、国家間の矛盾、衝突を避けるために努力する。

以上の 4 つの視角＝価値観を現代中国研究の目的、方法、課題とし、その成

果を日中両国国民、さらに世界に向けて発信する。そして相互に批判しあうことが大切だと思う。

こうして、まず第1に、日本人研究者は、その研究の目的として「日中両国国民の相互批判を伴った相互理解、それを仲立ちとした自己認識、自己批判を目的にする」べきだと思う。この文章は、森正夫氏が「名古屋大学新聞」（1980年）に書いたものであるが、これを今でも受け継ぎたい。第2に、研究主体は、日本人であることの利害関係を超えて、普遍的な人間、独立した1人の人間として世界のあらゆる国家権力、あらゆる強力から自由になって、知るところ考えるところを述べる勇気を持つことが大切だと思う。21世紀は「現存の国家死滅」（マルクス）が問われる世紀であることを前提、いや確信して以上の如く思うのである。